

大阪市立自然史博物館の幼保こども園向け 教育支援の取り組み

～来館の前後を含めた博物館体験の提案～

大阪市立自然史博物館 釋 知恵子
佐久間 大輔
横川 昌史

1. はじめに

大阪市立自然史博物館では、これまで小学校・中学校・高等学校を中心に、学芸員によるリクエスト授業や、職場体験の受け入れ、各種ワークシートの提供、貸出資料の提供、教員研修など、さまざまな形で学校向け事業の充実を図ってきた。まずは、理科等教科学習を中心とする学校教育に対しての支援充実を優先してきた結果、幼稚園・保育所・認定こども園（以下幼保こども園）への対応は後回しになってきたと言える。一方、大阪市立自然史博物館における幼保こども園の利用は、中学生以下の団体の約4分の1を占める。2017年度は156団体の利用があり、これは中学校の利用団体数より多い。2011年には、幼保こども園や小学校の低学年で利用できる貸出用紙芝居「ナガスケ」を開発した。大阪の海に流れ着いたクジラが、標本（ナガスケという愛称がついている）になって、博物館に展示されるまでのお話である。低年齢のこどもたちを主な利用者として作った初めての貸出資料であったが、以降、幼保こども園や小学校で多く利用される人気資料となっている。これまで来館者から、恐竜と間違われることも多かったクジラが、紙芝居を読んできたこどもたちから「ナガスケ」と呼ばれ、クジラと認識されるなど、その効果と手応えが感じられた。また、紙芝居により幼保こども園においても遠足の事前活動が行われることが分かってきた。現在、大阪市立自然史博物館では、幼保こども園に向けての教育支援の充実を図っている。事前・当日・事後の活動を結びつけ、より充実した博物館体験が提案できるように進めている幼保こども園向き支援ツールの開発について報告する。

2. 基礎調査

まず、幼保こども園向き支援ツールの開発に向けて基礎的なデータを集めるため、幼保こども園の博物館利用の実態に関するいくつかの調査を実施した。

1) 大阪市立自然史博物館を利用する幼保子ども園の利用実態調査

1) - 1 滞在時間調査

2016年5月から2017年3月に来館した幼保子ども園と、その比較として小学校を対象に、博物館（本館）の入館・退館時間を記録し、館内での滞在時間を調査した。207団体分を調査し、小学校は2学年ごとに集計した。結果は、図1の通りである。滞在時間は、どの団体・学年でも30～45分が多かったが、小学校1～4年生と比較して、幼保子ども園の方が45分以上の割合が多く、滞在時間が長い傾向にあることがわかった。これは、春・秋の遠足シーズンに集中して来館する小学校に比べて、幼保子ども園は、比較的年間を通して来館するため混雑時期を避け、ゆったりと見学できること、幼保子ども園では教員・保育士の一人あたりのこどもの人数が小学校よりも少なく、子どもと話をしながら見学していることが多いことによる結果と思われる。

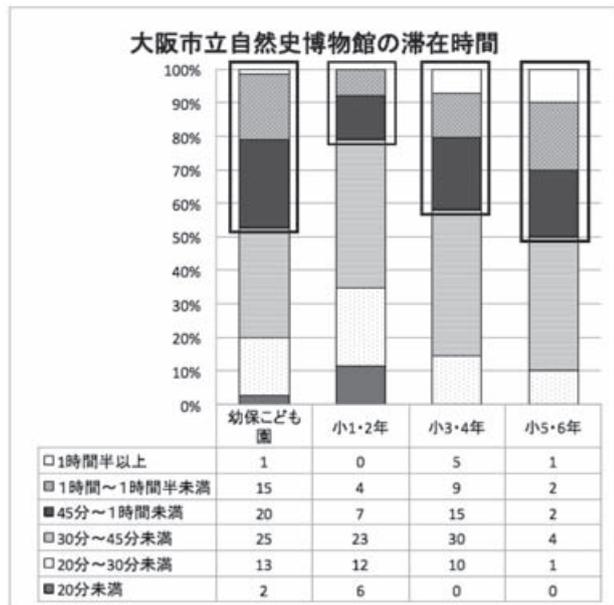


図1：大阪府立自然史博物館での団体の滞在時間。
太い口内が45分以上の滞在を示す。調査数は207。

1) - 2 幼保子ども園・小学校の博物館利用についてアンケート調査

2016年9月から2017年3月に、来館した幼保子ども園と、その比較として小学校1・2年生を引率してきた教員・保育士を対象に、来館目的や事前事後活動などについて、アンケート調査を実施した。遠足当日にアンケートを渡し、ファックスで回答をお願いした。配布数は135、回答数は52(幼保子ども園27、小学校25)で、回収率38.5%だった。

博物館への来館目的（複数回答可）で幼保子ども園の回答が小学校よりも多かったものとして特徴的だったのは、「博物館での活動を通して、気づいたことや楽しかったことなどを言葉・動作などにより表現し、考える力をつけたかった」と「子どもたちを連れてくる場所として

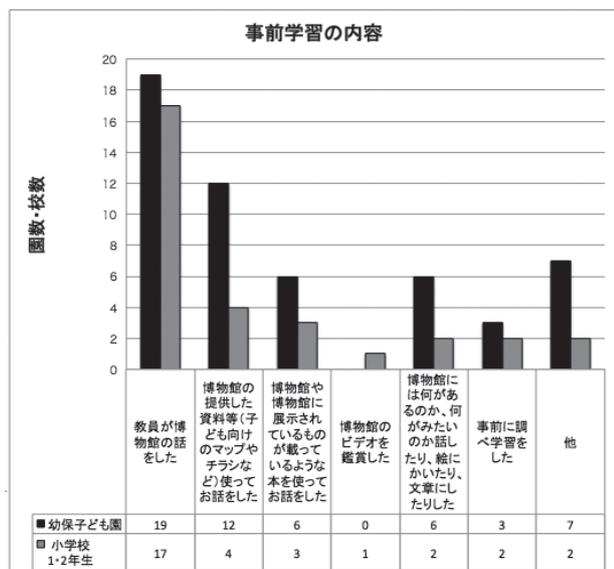


図2：幼保子ども園と小学校1・2年生における事前活動の内容。

安心できる環境である」という点である。特に表現するという点については、事前・事後活動についてのアンケート結果でもそれに応じた結果が出ている。

事前活動・事後活動の有無と内容を聞いた結果では、小学校1・2年生・幼保こども園ともに8割以上の団体で、なんらかの活動が行われているが、幼保こども園の方が小学校よりも実施割合が高く、活動内容では複数回答が見られるなど、活動が多岐に渡ることがわかった(図2・図3)。教員が博物館の話をする、博物館で展示されているものが載った本を使う、絵を描く・造形物を作るなど、こどもに向けての活動だけでなく、保護者へのお便り作りや写真の掲示などもあった。

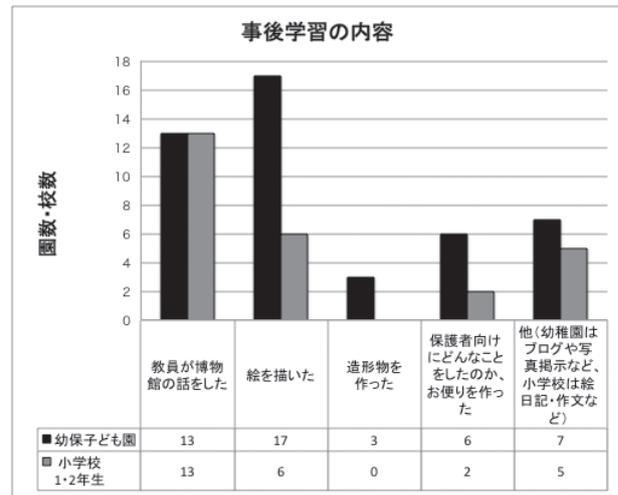


図3：幼保こども園と小学校1・2年生における事後活動の内容。

2) 他の博物館の幼保こども園に向けての対応実態調査

他の博物館の幼保こども園への対応を調べるため、2017年2月～3月に、全国科学博物館協議会加盟館(211館)対象にアンケート調査を実施した。郵送でアンケートを送り、回答は同封の返信用封筒で返送してもらった。回答数は125で回収率は59.2%だった。

学校団体を教育ターゲットとして重視しているのかという問いに対しては、およそ9割が重視していると答え、重視している順としては、小学校→中学校→幼保こども園→高等学校と回答する館が多かった。幼保こども園対応として、プラネタリウム・工作・実験など幼児向けプログラムを実施している館は24%あり、幼児向けのオリエンテーション・展示解説・パンフレット配布などを行っている館もあったが、およそ半数の館で、幼保こども園への対応について問題や課題があると感じていた。「館内の解説文が幼児には難しいので、どうしたら伝わるか」など、展示の内容が幼児には難しいと感じているからこそその課題と、「幼児向けによく考えられたプログラムが不足している。幼児教育に精通したスタッフがいない」というような、対応不足と幼児教育に関する情報のなさも影響しているようだ。

3. 支援ツールの開発

幼保こども園の博物館の利用では、他の校種同様、こどもたちと博物館の間に教員・保育士がいる。幼保こども園のニーズや実態をより深く知り、支援ツールを開発するため、幼稚園・保育所・小学校の教員・保育士、保育士養成に携わる大学教員、博物館関係者で企画会議を開

いてきた。企画会議では、博物館の利用方法や博物館に求めることなどを聞くことから始め、基礎調査の結果を共有しながら、支援ツールの企画について、具体的な内容を話しあった。これまでで5回の企画会議を行っている。

そこではまず幼保こども園にとっての博物館の利用は、興味を持たせるための種まきであることが強調された。また、幼児の博物館見学において、教員の役割は大きく、博物館ではいろんな見方ができること、どんな見方をしてもよいことを伝えることが必要であり、それが、教員・保育士がなじみある使いやすい形で提供されることも必要であることがわかった。幼児向けには難しいと思われる博物館の展示を、間にいる教員・保育士の助けによって、幼児に届けるために、下記の3つのことを考えた。

- ① 博物館の来館前後に使える資料の提供：絵を描く・本を読むなど幼保こども園での活動内容に合わせたものを
- ② 教員・保育士向けの資料の充実：幼児への言葉がけの参考になるものを
- ③ 来館時とその前後を通した博物館利用を提案

1) 博物館の来館前後に使える資料の提供

1) - 1 来館前に使える紙芝居セット「ナウマンゾウ」

幼保こども園では、毎日、絵本や紙芝居の読み聞かせが行われ、絵本や紙芝居は教員・保育士が使い慣れているツールである。みんなで読むための大型の絵本は作成もしにくく、メンテナンスの上でも、紙芝居の方が1枚ずつで差し替えやすいという利点がある。そこで、紙芝居「ナガスケ」と同じA3サイズの紙芝居を作ることにした。内容は、大阪市立自然史博物館に入ってすぐの展示であり、マンモスと間違われることも多いナウマンゾウが大阪にいたことを伝えるお話にすることにした。紙芝居をきっかけに、大阪にいたナウマンゾウの存在を知り、展示をよりじっくりと見てくれればよいと考えた。紙芝居「ナガスケ」は21場面あるため、幼児には長く感じられることもあり、紙芝居「はくぶつかんのナウマンゾウ」では、短く12場面にした。また、博物館への来館の期待をさらに高められるよう、ほかの資料をいくつか入れることにした(図4)。

- ① 博物館の展示を紹介するおまけカード：ナウマンゾウ以外にもいろんな展示があることを紹介するカード。こどもたちに人気の恐竜・世界の昆虫などの展示も入っている(A3版カード 7種 ラミネート加工 裏に解説あり)。
- ② ナウマンゾウの下あごの化石・足型・



図4：紙芝居セット「ナウマンゾウ」。右上から、時計回りに、ナウマンゾウ探検地図、おまけカード、紙芝居、パペット、ナウマンゾウの原寸大タペストリーが並ぶ。左上は、セットを入れるケース。

足のタペストリー：博物館の展示にあるものを原寸大にプリントし、大きさを実感してもらうためのもの（ポンジクロスという布に大型プリンターで印刷 解説のカードつき）。※途中で足の原寸大を追加

- ③ 博物館内のナウマンゾウ探検地図：博物館内でナウマンゾウの展示を見ることができる場所を示した地図。地図を元の原稿として増し刷りをし、こどもたちに配布することも可能（A3・A4版カード 各1枚 ラミネート加工）。
- ④ ナウマンゾウのパペット：博物館内で登場しているナウマンゾウのキャラクター「ナウゾウ」のパペット（手を入れて動かせる）。※途中で追加した資料

1) - 2 来館後に使える「ぬりえシート」と「思い出シート」

幼保こども園では、遠足の前後に絵を描く活動が多く行われるので、事後活動に使える「ぬりえシート」と「思い出シート」を作成することにした。「ぬりえシート」では、博物館の中でこどもたちの印象に残ったような展示物をいくつかとりあげ、自由に色ぬりができるようにした。「思い出シート」は、好きな絵を描けるシートだが、展示を思い出しながら描けるように、展示物をシートのふちどりとしてイラストで入れた。それぞれ裏面は、保護者へのメッセージとして、こどもたちが遠足で行った博物館がどのようなところにあり、どんな施設なのかを伝え、園所で使っても家で使っても、会話が広がり、再来館につながることを意識して作った（図5）。



図5：ぬりえシートと思い出シート。
裏面には、保護者へのメッセージがある。

2) 教員・保育士向けの資料

企画会議では、博物館内でこどもたちと会話するときには、見たものについて、これまでの経験や知識に基づいて、時に展示パネルを見ながら話をするという意見があった。こういったことができるには、教員・保育士としての豊富な経験や、基礎となる知識が必要である。そこで、経験年数が少ない教員・保育士も、気軽に見ることができる博物館の展示を紹介する資料を提供してはどうかと考えた。現在、絵本のような教員向け資料「しぜんしはくぶつかんの これなあに？」（仮題）を作成している。

4. 支援ツールの利用とまとめ

紙芝居セット「ナウマンゾウ」は、2018年4月から貸出を開始し、2018年12月末までの利用数は15（幼保こども園9、小学校4、支援学校1、大学1）だった。主に遠足の下見来館時に貸し出すため、5セット作った紙芝居セットは、下見集中時期には全部貸出をしまい、貸し出せない期間もあった。貸出をした幼保こども園には、紙芝居セットと、「ぬりえシート」「思い出シート」についてのアンケートへの協力を依頼した。また、了承が得られた場合、紙芝居セットの利用の様子を見にいき、可能な限り来館当日の見学の様子も観察した。アンケートの回答は7園所（すべて幼保こども園）から得られた。「こどもたちが喜びそう」「事前活動に役立つ」と資料を借りて、その結果は、期待以上・期待した通りであったと全員が答えた。また、全員が貸出資料によって、こどもたちの体験や学習が深まったと答えた。一方、資料の中では、ナウマンゾウの探検地図の利用が少なく、地図を見ながら活動するというのは、幼児には難しく、小学校向けの内容であることが理由だろう。まだ小学校の利用状況がアンケートの回答で得られていないので、幼保こども園での反応の違いを注意深くみていきたい。事前に利用してきた幼保こども園が来館したときには、玄関を入ってきたときから、「ナウマンゾウ」と呼ぶ声があがり、紙芝居セットで紹介したナウマンゾウの展示をこどもたちと教員・保育士と一緒に見る様子があちらこちらで見られている。

「ぬりえシート」「思い出シート」については、事後使った・使う予定であると回答したのは5園所あり、「園での活動に使う」は3、「家へのお土産に使う」は2だった。両シートとも実際に利用したシートを見るまでには至っていない。館内のイベントで、紙芝居「はくぶつかんのナウマンゾウ」の読み聞かせと「ぬりえシート」で塗り絵遊びをしたときには、保護者とさまざまな話をしながら、楽しそうに塗り絵をする様子があった。塗り絵になったものには茶色い展示物が多いため、展示物に近い色を塗ろうとすると、地味になってしまうというのは、想像していたところであるが、自由な色で塗っても良いということ、幼児は自由に塗っている場合が多かった。一方、小学生以上になると、本物らしく塗るということにこだわり、多様な茶色の表現を工夫する様子が見られるなど、年齢によって楽しみ方が違うことがわかった。

幼保こども園での紙芝居セットの利用の様子を見学すると、多様な使い方が見られた。紙芝居の前に、ナウマンゾウの原寸大タペストリーを利用して、ナウマンゾウに興味をもたせてから紙芝居に入る園もあった。博物館に行ったことのある幼保こども園では、おまけシートを見せて博物館に行ったことを思い出させ、後から紙芝居を見せていた。こどもたちの経験に合わせて、普段そのこどもたちを見ている教員・保育士が使い方を考える、さまざまな付属の資料をつけたために、自然に多様な使い方が生まれているようだ。

現在は、教員・保育士向けの支援ツールを開発中であるが、紙芝居セットと2種のシートについても、改良を重ねている。例えば、紙芝居セットでは、ナウマンゾウの大きさがあまり伝わっていないように感じ、より驚きを持って感じてもらうため、館内で展示されている復元模型の原寸大の足を追加で布プリントをして入れることにした。また、より多くの団体に利用しても

らうため、10セットを増やすなどした。

この取り組みを通して、博物館の来館の前後を含めた博物館での体験を提案することで、1回の来館をより充実させ、深く印象に残る経験にしたいと考えている。これは、幼保こども園だけに限らず、他の校種にも共通することである。これをきっかけに、教員・保育士の力を借りながら、より深い体験へと誘うものはどんなものなのかを考え、他の校種に向けた取り組みも見直し、博物館の教育活動の一つとして学校連携の改善・充実をはかっていきたい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP16K01208 の助成を受けたものである。また、「幼児と教員のミュージアム・リテラシーを育てる企画会議」のメンバーをはじめとして、アンケート調査や紙芝居の試行や実施見学など、多くの方にご協力いただいた。関係のみなさまに感謝申しあげる。

